

輝く白雲

経済・経営両学部五十年の歩み

昭和四十九年十二月十日、横浜国立大学経済学部・経営学部は、その前身旧制横浜高等商業学校設立認可の日から数えて正に五十年に当たるため盛大に創立五十年の式典を挙行した。そもそも横浜は近代日本発展にとって大きな窓口たる役割をもった国際都市でありながら、首都に近接の故か、長い間高等教育機関の設置を見ることがなく半世紀以上も経過した。ようやく県市民の熱心な運動効を奏し、第一次世界大戦後の大正九年、横浜高等工業学校（本学工学部の前身）の設立を見ることとなったのである。さらに日本経済の世界的大躍進を反映して、大正十四年には横浜高等商業学校の開設が日程にのぼっていた。しかるに大正十二年関東大震災起こり、横浜の被害また甚大で、ほとんど焦土と化した。県市民の間からは直ちに復興への意欲が湧きあがり、時の政府またこれを支援したが、その先駆として横浜高商の開設を一年繰りあげる英断を示し、同年十二月十日をもって勅令第五百一号でその旨を公布したのである。ついで十二月十八日には早くも長崎高等商業学校校長田尻常雄氏を初代校長に発令し、東京丸の内に在った台湾銀行の一室を借りて開校準備を進めることとなった。

翌大正十三年三月に入学試験を行なったが、受験者は実に一千二十八名を数え、百三十五名を選抜し、四月二十一日第一回の入学式を弘明寺の横浜高工の仮校舎において挙行した。かくて横浜高商は神奈川県民、横浜市民多年の翹望を背景に、焦土のうちに呱呱の声をあげたのである。しかしながらこの厳しい環境はかえって教職員、学生に良き刺激となり、精神的緊張をもたらした。堅実な校風の樹立に少なからず好影響を及ぼしたことを重視しなければならない。田尻校長は、本校の教育主義を、信頼しうる人物の養成に主眼を置き、将来独立自営たると他に使用せらるるを問わず、自らを深く信ずるとともに他より安心して全任せられる人物の養成にありとされた。まことに勝れた教育方針であるが、爾来、人格的にも実力的にも信頼に足る卒業生を輩出する良き伝統は育ち、継承されて現在に至っているのである。

大正十五年三月には、校地を南区清水ヶ丘の地に相し、鉄筋コンクリート建の白壁の美しい校舎の竣工を見て、翌昭和二年三月十五日をもって第一回の卒業式を挙げ、百十七名の若人が巣立った。当時の日本は不況のどん底にあえいでいたが、本校卒業生の就職状況はすこぶる好調で、求人数は求職数の二・七八倍に達したという。本校に対する世人の信用が如何に高かったかを物語るものにほかならない。本校は創立以来常に受験者数が入学定員を遙かに上廻った関係で、優秀な学生を迎えることができ、就職状況も常に好調を続けている。堅実な校風に対する世の評価が固定し、現在に至っていることは周知のことであろう。

昭和十九年三月には戦時学制改革によって、校名を横浜工業経営専門学校と改称し、さらに終戦後の二十一年三月になって横浜経済専門学校に統一した。ついで昭和二十四年には戦後の大学

制改革により、県内の四官立専門学校を構成校として横浜国立大学が創設されるや、その一翼を担って経済学部と成った。初代学部長には、高商創立以来在職の徳増栄太郎教授が就任し、新しい学部の発展に尽瘁した。而して経済学部では、創設早々、横浜国立大学経済学会を設立し、機関誌『エコノミア』を創刊し、今日に至っているが、これこそ学問教育への真摯な態度を示したものだといわなければならない。

昭和四十二年六月には懸案であった経営学部の分離独立が行なわれ、久保村隆祐教授が初代学部長に就任し、鋭意学部の発展充実に努力した。昭和四十七年には、経済・経営両学部に大学院修士課程の設置が認められ、一層の発展拡充が期せられたのである。

創立五十年に当たる昭和四十九年には、奇しくも多年親しんだ清水ヶ丘校舎を後に、両学部は新装の保土ヶ谷区常盤台のキャンパスに移動した。

竹は節あるが故に強靱であるといわれるが、学園にとっても十年、二十年あるいは五十年という年は目に見えない節に当たり、節ごとに過去を回顧し、先人の業績を偲び、将来への展望をなすことによって内なる充実が期せられなければならないものと考ええる。今日、五十年という大きな節に当たり、改めて、良き校風を築かれた創設者の識見と英知に敬意を表し、またそれを継承した歴任教職員各位の努力と精進を想い、さらにまた卒業生諸君の並々ならぬ母校愛には深い感動を覚えすにはいられない。

創立記念事業の一つである『横浜国立大学経済学部・経営学部五十年史』には各卒業年次を代表する富丘会会員の母校に対する熱烈な慕情を物語る思い出が載せられてある。母校と卒業生と

が太い絆で結ばれていることにこそ、教育の成果は端的に現われるものと信じている。本書は横浜高商二十五年、横浜国大二十五年、合わせて五十年の高等教育の成功を顕証しているものと断言して憚らない。

経済・経営両学部 of 今後における一層の発展充実に賛念して本書の序文とする次第である。
昭和五十年九月

横浜国立大学学長 水戸部 正男

歴史の試練にたえる大学へ

横浜国立大学の経済学部と経営学部の前身である旧横浜高等商業学校は、第一次世界大戦後のいわゆる高等教育拡張六カ年計画の一環として、関東大震災直後の横浜に創立されました。爾来着実な発展をつづけて、ここに創立五十周年を迎えました。この間、戦争末期の昭和十九年に横浜工業経営専門学校へ転換し、敗戦とともに、昭和二十一年に横浜経済専門学校に再転換し、つづいて昭和二十四年の学制改革にともない、横浜国立大学経済学部に移格しました。大学発足後は、経済学部第Ⅱ部の併設、貿易学科の増設、経営学部の分離独立、大学院修士課程の設置など質・量ともに大幅な発展をとげて、今日に至っています。

同種の高等商業学校のうち、第十一番目、つまり、いちばんあとに設立されたのが横浜高等商業学校がすでに戦前期において、創立十年を出ずして、「天下の横浜高商」としてその名が全国的に知られ、戦後、新制大学へ昇格後は、優秀な教授陣を擁して学問的水準の高い学風を堅持しまた、各界で活躍する多数の優秀な人材を輩出して、わが国の高等教育機関の一角に揺ぎない地位を築いたのであります。

五十年間に社会へ送り出した卒業生の数が一万名にも満たない規模の小さな本校がこんにちの隆盛と社会的評価を得るようになったのは、京浜重工業地帯に位置した「地の利」を得たことにもよりましようが、基本的には、第一に、揺籃期において本校の礎石を築いた田尻常雄初代校長の教育者的情熱と抜群の指導力、第二に、旺盛な学問精神をもって教育・研究に専念し、自由にして創造的な学風をつくり、本校のアカデミックな学問的伝統を培った当時の若い教授たちの精進、第三に、全国各地から笈を負って清水ヶ丘に登ってきて、青春の全エネルギーを投入して、学生生活をひたむきに生きていることによって、横浜高商独特の校風を創った学生たちの活力、この三者が織りなして、本校の輝かしい伝統が築かれたことによるのだと信じます。

こうして創られた輝かしい伝統に、戦後、新制大学の発足に際し、民主的で自由な大学・学部の創建をめざし、教官・学生が一体となって注いだ創造的エネルギーと真剣な努力の積み重ねとが加わって、こんにちの充実と発展があるのだと思います。

昨年八月、われわれは半世紀の歴史を刻んだ清水ヶ丘の校舎に別れを告げ、常盤台の新キャンパスへ移転して、創立五十周年を祝賀しました。

常盤台への統合移転と創立五十周年を迎えたいま、われわれはわが学園史の新しい創期に入ろうとしています。戦前の高商時代を第一期、清水ヶ丘の新制大学の時代を第二期とすれば、第三期がこの常盤台で始まるうとしています。この第三期を、両学部にとって真に充実した飛躍の時期とするために、われわれに課された贅務の重大さを痛感せざるをえません。

いま、世界じゅうの大学が現代文明の危機に直面して、厳しい試練の前に立たされています。

わが国でも、六〇年代末から七〇年代ははじめにかけて、大学と学問の在り方にたいする根源的な問いかけがなされ、大学紛争となって全国的に吹き荒れました。しかし、大きな犠牲が払われたにもかかわらず、問題は正しく解決されず、時代と広範な国民層が提起した課題にたいして、大学はなにひとつ答え得なかったばかりでなく、多くのよき伝統すら失われたのは、まことに遺憾です。

しかし、いまこそ、われわれは国民的視野と文明史的展望のうえに立って、大学の真の在り方学問の在り方を模索し追求して、歴史の試練にたえる大学を創りあげるためにいっそうの努力を傾けなければならない時点に立っていることを強調したいとおもいます。

『横浜国立大学経済学部・経営学部五十年史』は、経済・経営両学部と富丘会の共同事業として計画されました。本校の校史としては、昭和十八年の創立二十周年のさい、故徳増栄太郎教授らによって、『横浜高等商業学校二十年史』が編纂されたことがあります。今日の五十年史はそれ以来の校史編纂事業であり、高商・経済学部・経営学部の五十年の歴史を、学生生活を主体として叙述したところに大きな特色があります。本書がこのように非常にユニークな校史として完成をみしたのは、松島精君（高商十五回）の二年間にわたる献身的な努力によるところ、きわめて大であります。ここに五十年史の刊行を喜ぶとともに、同君の労苦にたいして、経済学部を代表して、謝意を表する次第であります。

昭和五十年三月

横浜国立大学経済学部長 大崎 平八郎

ひたむきな前進の基礎として

久遠の過去から永劫の未来へと、よどみなく続く時の流れの中で、人類が生きている期間というものは極めて僅かな時間にすぎないでしょう。そして横浜高等商業学校開校以来経過した五十年という時間も、この短い時間の中の一瞬にすぎないかも知れません。しかし、これは昔の人々にとっては苦楽愛憎に満ちた人間の一生涯に相当する時間でもあったのです。

このように見方によっては短くもあり、また長くもある五十年という時間は現在の私どもにとっては、一つの、はっきりした時間の区画でして、ここで過去を顧み未来を考えるために五十年を記念する行事をおこなうということは非常に意義のあることだと思われまふ。

そこで、このような行事の一つとして、まず昨年十二月十日に横浜国立大学経済学部・経営学部五十周年記念式典とパーティとが盛大に開かれ、この半世紀にわたる輝かしい学校の歴史を回顧するとともに、将来へのゆたかな発展を祈る機会をもつことができました。これは、また自然的、社会的環境の現状を充分に認識した上で人類と日本の将来を考え、教育と研究の機関としての組織体の在り方を反省してみるのに良い機会でもありました。

次に、これと併行して今回、『横浜国立大学経済学部・経営学部五十年史』が両学部と富丘会の手によって刊行されることになりました。これは両学部の人々に、この五十年史の歴史的認識を基礎とし将来へ向かって、ひたむきな前進をするときの貴重な資料を与えるものとして極めて有意義なものであるといわなければなりません。

顧みますと、この五十年の歲月は日本の歴史にとって未だかつてない大事件が、あいついで起きた時期でありましたが、教育と研究に従事してきた者にとっても、まことに苦難に満ちた時期でもあったのです。しかし、この時期も多くの人々の献身的な努力により無事にのりきり、かつての横浜高等商業学校は横浜工業経営専門学校、横浜経済専門学校、横浜国立大学経済学部を経て現在の経済学部と経営学部に進で発展することができました。そして校舎も全学の統合計画にしたがって昨年八月、なつかしい清水ヶ丘の白壁の殿堂に別れを告げ、保土ヶ谷常盤台の高層ビルに移転しました。

この間多くの先生方の学問に対する燃えるような情熱は、それぞれの専門分野で、めざましい独創的な研究成果を生み出し、わが国だけでなく世界の学界に寄与するところ極めて大なるものがありました。また、これらの先生方の御薫陶をうけた多数の卒業生は、それぞれの職場で、すぐれた才能を遺憾なく発揮し、わが国の産業の飛躍的な発展と文化の興隆に偉大な貢献をしてきました。

しかし、音もなく流れ去った、この半世紀にわたる歲月はまた、いまでは開校当時の先生方をほとんど連れ去り、現在御存命の方は、わずか数名にすぎなくなりました。私事にわたって恐

縮ですが、昭和四年春から昭和七年春まで学生として、これらの先生に大変お世話になった私にとって、この間の思い出もまた少なくありません。

あの出来たばかりの白堊の殿堂の中で、まず、ウィットに富み、温情のあふれる田尻校長の名演説に迎えられ、教室では古館先生の、春の日の午後、うっとりするような隣義に耳を傾け、牧歌的な詩情をふりまき永遠に序章を脱くようだといわれた渡辺先生の隣義に魅せられ、わずかの油断も許されない難解な小幡先生の隣義をかみしめるように聞き、運動場では、いつも過去の輝かしい体験を得々として語ることを忘れなかった下津屋先生の体操で身体を充分にきたえられた過去の日々も、すべて今となっては、なつかしい思い出となりました。

この思い出の糸の一番新しいところに現在の経営学部があります。私どもの学部は五十年の歴史的背景をもっていますが、学部そのものとして誕生したのは昭和四十二年六月でした。現在までに僅か八年弱の歳月が経過しているにすぎません。しかし、この間最初は経営学科だけでしたが、経営学科、管理科学科と大学院をもち、近く会計学科も開設されるまでに発展しました。このような短期間に急速な発展をみせたことは五十年史の中でも稀にみることであるといえましょう。私どもは、この際この半世紀にわたる歴史の重みを充分にかみしめ、今後、内容の充実した発展をめざして一層の努力を続けていくことでしよう。

ここに五十年史の刊行にあたり、たゆまない研究の寸暇を割いて編集の労をとられた両学部の編集委員と全精力を傾注して執筆に当たられた松島精氏に対し、心から謝辞を述べると共に、本

書の内容について貴重な御配慮を賜った富丘会長、野村長氏に対して深甚な謝意を表する次第であります。

昭和五十年三月

横浜国立大学経営学部長 佐藤 信 吉

生き生きと描かれた学園史

五十年史とか二十年の歩みとかいったものは、およそ面白味とは縁遠い無味乾燥の感じしかでてこないもので、まずは書棚のお飾りといった表現がピッタリのものである。

大企業の社長などを訪れてまず応接室に通されると目に入ってくるのがこの……会社五十年史が書庫のガラスを通じてにぶい光りを放っている風景である。

「こういったマンネリの年史作成はやらないほうがよい。われわれの母校の歩んだ五十年は成長と挫折と動乱と変化のダイナミックな背景に彩られた、華麗なる充実の途であって、これが投影され影響した横浜商商のカレッジライフが生き生きと描写されたものをつくらうではないか」というのが五十年史編集委員会の結論であった。

しかも、一見して青春の学生生活をまのあたりに想い出すような、年史の視覚化を図ろうというので、各年代の卒業生がパッと自己のクラスを指摘できるような写真多数を記事のなかに折りまぜて、五十年史のヴィジュアルイゼーションを図ろうということになったのである。

これならただの五十年史じゃないぞ、生きた学園史になるぞ、ところで誰に書いてもらうのか

というところで、学友松島精君の登場とはなったのである。松島君は富士見寮で小生と隣り同士の部屋で、経済よりは哲学に志向し、宮成教授のゼミナールでも一、二を争う俊才であり、その形而上的なものへの探究意欲は十五回生の中でも際だっていたものである。その彼が戦後朝日新聞の記者から文筆業に身を投じたのであるが、その間一貫して私が彼に感じている事は、彼の体臭としての純粋な哲学的なものであった。世事にそまらない、雑事と妥協しない彼の生活態度は時に彼を困難におとし入れた事もあったようであるが、彼の資質は益々光ってきた。母校の五十年と彼の仕事の一段落とがうまく重って理想的なタイミングで彼に書いてもらえた事は、神様のおぼしめしと感謝している。一般の著述者に眼を転じて、彼にまさる年史ライターはいないと確信しているだけに、われわれは幸運であったと思う。

大崎経済学部長、佐藤経営学部長、宮崎教授をはじめ、学校当局の全面的な御協力にも紙面をかりて厚く御礼を申し上げます。

どの学校の歴史にもまして充実したわが母校の生々発展が、深い分析と鋭い思考と豊富な資料に統一されて、まことにユニークな五十年史として発刊された事に衷心よりの喜びを欣び得ないものである。同窓の諸兄諸先輩をはじめ、学校関係者のみならず一般の有識者にも、一読をおすすめるのに何の躊躇もしない事を、深い喜びと誇りをもって感じている次第である。

昭和五十年九月

富丘会会長 野村 長

編集委員会まえがき

一年有半を要して、ようやく母校五十年史の全巻を執筆、整理し終えることができた。一昨年（昭和四十八年）十一月、母校側大崎経済学部長、富丘会野村会長の出席をえて初の編集会議を持ったとき、五十年史は資料的なものではなく、各年代の学生生活をほうふつさせるようなエピソードのふくらみを持ち、それにふさわしい写真を要所要所に配した、ヴィジュアルな読みものにしてほしい、というのが、出席者一同の一致した意見であった。

この方針に基づき、同年十二月、さらに学校側編集委員宮崎義一、奥村應一両氏と具体的な執筆、編集の方針を打ち合わせたうえ、富丘会側編集委員の天野八郎氏の協力をえて、早速取材と資料収集に取りかかった。以上のような「眺まれる」五十年史にするため、過去の埋もれたエピソードをできるだけ豊富に集める必要があり、その取材の方法として、まず同窓生の座談会によることにした。こうして四十九年の二月から、母校における同窓生教官の座談会を皮切りに、高商一回から最近の大学卒までをほぼ五回次ずつに区切り、合計九回の座談会を開催した。そのほか筆者が個別に旧師、旧事務職員の方々、あるいは卒業生の方々からお話をうかがい、かつ資料

を頂いたりお借りしたりした。

まとまった資料としては、戦前の『高商学報』、『学校要覧』、戦後初期からの『富丘会報』、『東京支部会報』の一部、高商二回生のクラス会で出しておられる『昭三会々報』を見ることができた。戦後の学生新聞については、新聞部も学生の完全な自治活動になったせいか、学校にとじ込みの保存がなく不自由したが、そのかなりの部分を若い同窓生の好意により借りることができた。この機会に、お話をお聞かせ頂いた座談会出席の同窓生の方々、諸先生、諸先輩、貴重な保存資料を提供またはお貸し下された皆様、ならびに経済・経営両学部長と同事務局の方々に、厚くお礼を申し上げたい。

このようにして、諸先生ならびに同窓諸氏からのヒヤリングと上記諸資料からのファクト・ファインディングによって、五十年史の本記八章が構成された。そして、本記をほぼ脱稿しかけていた五十年四月はじめ、新装成った富丘会館で母校側（中村静治、宮崎義一、稲葉元吉の三氏）と富丘会側編集委員との会合を開き、筆者から本記の大筋について説明を行ない、諸氏の了承を得たのである。しかし、歴史は単なる資料の羅列あるいはつなぎ合わせではありえない。「歴史とは現在と過去との間の尽きること知らぬ対話である」としたE・H・カーも述べているように、歴史はそれを記述する者による資料の解釈と評価のうえに成り立つ。とりわけ、上記のように読みものとして興味の持たれる歴史を審こうとする場合には、そうならざるをえないであろう。この意味においては本記の具体的な記述についての責めは、挙げて筆者にあることをお断わりしておかねばならない。

つぎに、五十年史をヴィジュアルなものにするための写真は、主として、母校に保存されていた高商卒業生各期のアルバムに加えて、大学昇格後については宮崎義一教授保存の各期アルバム、その他同窓諸氏から借り受けたアルバムからピックアップ・アップした。あの富士見ヶ丘（清水ヶ丘）で若き日々を送った同窓生諸氏の学生生活をありありと再現するような、ヴィジュアルで面白い眺み物になったかどうか、自らの非才を嘆くばかりであるが、せめて各氏のメモリーをゆり起こすよすがともなりうれば、幸いこれに過ぐるものはない。

編集委員は、筆者を含め左記の各氏であり、そのご協力に対して深甚なる謝意を表したい。

（敬称略）

母校側

（経済学部）宮崎義一（高商十五回）、神代和俊（大学三回）、岸本重陳（大学八回）

（経営学部）中村静治（高商十回）、奥村恵一（大学四回）、稲葉元吉（大学九回）

富丘会側

松島 精（高商十五回）、天野八郎（高商十八回）

なお、五十年史編纂の事業は、筆者の同期生でもある野村富丘会長はじめ会の役員諸氏、ならびに会事務局の黒須氏らの、終始かわらぬ暖かいご支援によって成り立ちえたことは申すまでもないことである。

昭和五十年九月

五十年史編集委員代表・執筆者 松島 精

目 次

経済・経営両学部五十年の歩み

横浜国立大学長 水戸部正男 1

歴史の試練にたえる大学へ

横浜国立大学経済学部長 大崎平八郎 5

ひたむきな前進の基礎として

横浜国立大学経営学部長 佐藤 信吉 8

生き生きと描かれた学園史

富丘会会長 野村 長 12

編集委員会まえがき

五十年史編集委員代表 松島 精 14

第一章 大正デモクラシーの残照

1 廃墟のなかから……………25

2 間借り人は辛い……………0

3 学友会の誕生……………34

——若さあふれる学園——

4	人生意気に感じては……	28
	——創設期の行政スタッフ——	
5	白聖の殿堂へのみち	41
6	大正デモクラシー	45
7	友のうれいに	49
	——三・一五事件——	
8	ある青春	56
	——金融恐慌の前後——	
	第一章のための資料	64

第二章

	シュトルム・ウント・ドランク	81
	——疾風怒濤の季節——	
1	学園の創業成る	91
2	信頼の人となれ	98
	——田尻常雄と鈴木遠治——	
3	浜の早慶戦 その一	100
	——高岡・高工野球定期戦——	
4	浜の早慶戦 その二	104
	——富士見ヶ丘の時人たち——	
5	学校新聞成る	107
	——学園の文化活動 その一——	

6	高商名物外語劇	113
	——学園の文化活動 その二——	
7	師たちの、そして師弟の語り	120
8	学生たちのくらし	127
	——下宿料、寮生活、同窓会のことなど——	
9	貿易別科創設——就職難時代	134
	——統・学生たちのくらし——	
	第二章のための資料	143

第三章

	自由の灯いまだ消えず	153
1	開校十周年前後	153
2	軍事教練もたのし?	160
3	そのころの学生生活	165
	——学内の雰囲気、読書、映画——	
4	そのころの学生生活(つづき)	170
	——寮祭、同窓会談話、就職——	
5	野球部全盛時代	175
6	国際性の伝統 その一	182
	——外国語の教官たち——	
7	国際性の伝統 その二	186
	——国境を越えた人間の交流——	

8	学園の緊張加わる……………	180
	第三章のための資料……………	185

第四章 軍靴の音高まる果てに……………

	——開戦前後から敗戦まで——	
1	ニヒリズム……………	211
2	断髪令・無定形の抵抗……………	218
3	自由の灯は消えなんとす……………	223
	——学報部事件、「發現」問題など——	
4	集団勤労作業、興亜青年勤労奉国隊始末……………	230
5	学校報国団結成、開戦へ……………	235
6	緒戦の空襲、戦時下最後の定期戦……………	240
7	勤労動員、学徒出陣……………	245
8	田尻校長から岡野校長へ、横浜工業経営専門学校……………	249
9	学校工場秘話……………	255
10	横浜大空襲、あゝ広島……………	259
	第四章のための資料……………	265

第五章 敗戦、再び廃墟のなから……………

1	八月十五日前後……………	259
	——岡野校長、富成教授のことども——	
2	頼まれて卒業した二十回生……………	265
	——「豚眠寮」異聞……………	
	——終戦直後の学園風俗 その一——	
3	運動部、サークルの再建……………	307
	——終戦直後の学園風俗 その二——	
4	野球定期戦復活す……………	313
	——占領下ヘマの市街——	
5	大学昇格への胎動……………	322
	——フルバイト時代はじまる——	
6	戦後民主化へ進む学園……………	328
	——学生自治会の台頭——	
	第五章のための資料……………	338

第六章 国大経済学部創世記……………

1	「国立」を名のる唯一の大学……………	345
2	新旧混在・『国大新聞』創刊てんまつ……………	350
	——高崎、風留の歴史聞き——	
3	一般教育・二期校問題、花の女子学生……………	358
4	そのころの富士見寮……………	365
5	学生たちのくらし、就職……………	372

6	サークル活動・高まりゆくたこえ	377
7	学風創造運動	388
8	疾風いたる	385
	——学生運動にもかげりが——	
	第六章のための資料	404

第七章 安前・安中・安後

——経営学部分離独立

1	もはや戦後ではない	435
2	安前期の学園	442
	——異次学長就任、緑化事業、インターセミなど——	
3	安前派学生の生活と意見	453
	——学生新聞の世論調査をみる——	
4	六〇年安保問題	464
5	分裂する学生運動	471
6	学園統合に立ちあがる学生たち	477
7	経営学部分離独立	485
	——教員の薪田文春、金田ゼミ、ESSのことなど——	
8	学園内の亀裂深まる	488
	第七章のための資料	502

第八章 全学統合への途

——断絶の谷間を越えて

1	断絶の季節	537
	——四十四年学園大紛争、その背景と発端——	
2	統・学園大紛争	540
	——十一月封鎖へ——	
3	「大学とは何ぞや」	553
4	機動隊導入・封鎖解除への過程	560
5	学園平静にむかう	568
	——館科学長就任、大学本部常盤台に移転——	
6	大紛争のきずあと	577
	——退会紛争事件——	
7	一般教育改革——その経過	583
8	一般教育全学出勤方式、大学院設置さる	589
9	全学統合へ——エピソード	595
	第八章のための資料	603

富丘会小史

あとがき	633
おもな参考文献	636